

巻頭言

神出瑞徳（科学技術・生存システム研究所）

総合知とは、複雑な政治、経済、社会および人間そのものの諸課題を自然、社会、人文科学の知を融合して解決しようとする方向性、精神いう。文理融合、学際などの掛け声から始まり、最近のビッグデータ処理まで総合知指向の運動である。ここでは総合知が目指すべきこれからの目標について考えてみたい。

近代科学技術文明は人間の欲望を科学技術で満たすことを進歩だと信じてきた文明である。先進国、発展途上国なる言葉がそのことを象徴している。人間の欲望の満たし方は大航海時代から500年続いてきた資本主義システムによった。これは情報化社会になった現在も変わらない。

20世紀末から21世紀初頭にかけて世界のいくつかの研究機関や大学が20世紀科学技術文明を評価した。その結論は「功罪あい半ば」であった。医療、生活水準の向上など「功」もあったが、それに伴い二度の世界大戦や地球環境問題など「罪」も出現した。なかでも資本主義の利潤追求という性（さが）の当然の帰着である、一部の裕福層への富の集中と大多数の貧困という格差の問題は大きな「罪」である。マハトマ・ガンジーは人権とインド独立で、またネルソン・マンデラは南アの反アパルトヘイトと民族融合で大きな功績を上げた。しかしこの偉大な聖人政治家をもってしても格差、貧困問題は残った。さらに途上国だけではなく先進国内の格差の問題も顕在化してきている。

技術革新と経済成長によって欲望を満たし、発生した環境、資源など諸問題はさらに技術革新で対応する、このマッチポンプ型の文明を21世紀の人類は続けてゆくのであろうか？それにより貧困格差問題は解決するのであろうか？

総合知が目指すべき21世紀のターゲットはこの課題である。地球上の各民族の平均寿命を50歳から100歳として、その間の衣食住、健康、教育、公共サービスを保証するいわば、一種のシビルミニマムな「生存システム」を設計すべき時期に来ている。18世紀からほぼ300年続いた近代科学技術文明の自然、社会、人文科学知を総合知化することによって実現可能であると考え。この「生存システム」は気候風土、各民族の有する文化によって形態が異なるが基本的には自律分散協調型システムである。歴史に揉まれ、鍛えられてきた自由主義、資本主義は人類の貴重な財産であるが、上記の生存システムの構築と運用の僕(手段)になる。

『老子』、仏教、ユダヤ教、キリスト教、イスラム教、ヒンズー教は一致して「小欲知足」を説いている。21世紀文明をこれまでと異なる第2期科学技術文明と呼べるかどうかは「生存システム」が人間の欲望を自律的に制御する「小欲知足システム」であるかどうかにかかっている。